

令和 6 年度

大阪大学
人文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学 人文学研究科・文学部

教育支援室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

令和 7 年 7 月

目次

はじめに	教育支援室インターンシップ専門委員（人文学研究科准教授）	平光文乃	1
演劇学インターンシップ概要			
.....	中之島芸術センター特任教授 人文学研究科演劇学コース兼任教授	永田 靖	2
演劇学演習インターンシップレポート①			
.....	文学部 人文学科 演劇学専修2年	石川 瑠乃	3
演劇学演習インターンシップレポート②			
.....	文学部 人文学科 演劇学専修2年	西村 奈津希	5
演劇学演習インターンシップレポート③			
.....	文学部 人文学科 演劇学専修2年	WU I WEN	8
演劇学演習インターンシップレポート④			
.....	文学部 人文学科 演劇学専修2年	吉川 咲那	12

本報告書は、令和6（2024）年度に大阪大学文学部および大学院文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものである。実習先・人数は以下のとおりである。

学部生 7 名

報告書を読むと、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れる。学生たちを迎えて指導して下さった受け入れ機関の方々に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げる。

参考のために、平成 18 年度～令和 6 年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておく。

	R4	R5	R6	計
音楽	7	6	0	70
演劇	3	4	8	64
美術	0	5	0	23
映画	-	-	-	7
小計	10	15	8	164

教育支援室インターンシップ専門委員（人文学研究科准教授）平光 文乃

演劇学関係インターンシップ概要

中之島芸術センター特任教授 人文学研究科演劇学コース兼任教授 永田靖

演劇学研究室では、「劇場制作演習」として、兵庫県立尼崎青少年創造劇場の協力のもと、劇場制作についての研修を行っている。2024年度は、兵庫県立ピッコロ劇団ファミリー劇場『さらって行ってよピーターパン』（別役実作・眞山直則演出）を題材に、12月18日から21日（参加者多数のため、最後の上演日研修を21日のグループと、22日のグループに分けた）の4日間にかけて実施した。

事前のオリエンテーションを11月25日に芸術研究棟芸2教室で行った。授業担当教員（永田）が受講生に対して、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説した。同時に今回の研修についての必要な姿勢と考え方について述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを説明した。

授業の狙いは、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日（もしくは楽日）を制作として研修することである。また演劇上演の現場に触れながら、どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか、作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まって行くか、ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか、そして観客は作品をどのように受け取っていたかなどについて現場の体験を通して学ぶことにある。また今回はピッコロ劇団のバリアフリー上演の実践でもあり、どのようにして演劇上演をバリアフリー化していくのかを実践を通して学ぶ貴重な経験となった。

これらのことを通して、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことが目的である。

受講生は、12月18日から実際にピッコロ劇場において研修を受ける。仕事の内容は、いわゆる「表方」、制作面での仕事である。広報、観客席廻り、ゲネの手伝い、観客受入準備とその対応、上演後の片付けなど様々であるが、併設するピッコロ演劇学校の授業参観やスタッフのレクチャーも受ける。その後、12月21日&22日の上演には場内整理や制作業務を研修する。それらを通して演劇公演という「出来事性」についてその一回性、反復性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、受講生は報告書を提出する。授業担当教員（永田）はそれらによって成績評価を行う。報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらおう。

演劇学演習インターンシップレポート①

文学部 人文学科 演劇学専修 2 年 石川瑠乃

【研修先】

兵庫県立尼崎青少年創造劇場

【研修期間】

2024 年 12 月 18 日～20 日、22 日

【研修内容】

研修 1 日目は、ピッコロシアターの施設案内をしていただいた後、ピッコロシアターについての説明を受けた。ここでは、青少年の自由な創造活動を促進し演劇活動を活性化させるという目的に基づいたピッコロシアターの成り立ちや取り組みについて教えていただいた。また、ピッコロシアターが現在抱えている問題について、集客数がコロナ禍以前まで回復ができていないことや、音響等の設備や装置の老朽化が進み更新が必要となっていることなどが挙げられた。ピッコロシアターについての説明が終わると、ピッコロシアターでの公演内容やその公演ができるまでの過程についての説明を受けた。ピッコロシアターには県立ピッコロ劇団という劇団があり、ピッコロシアターの自主事業としてピッコロ劇団公演を行っている。ピッコロ劇団公演にはさまざまな種類があり、若手劇団員が演出家を務めるオフシアターや大人向けの本公演、中学生を招待したわくわくステージ、地域の小学校に出向いて行うおでかけステージなどがある。またピッコロシアターの自主事業公演は、劇団員や職員から企画案を募集しプレゼンテーションを行った後決定しているという。研修 1 日目の最後は、ピッコロシアターが運営している舞台技術学校の授業を見学した。まず美術コースでは、小道具を制作する授業を見学した。照明コースでは、ダンス映像を見ながらどのような照明がふさわしいかの話し合いが行われていた。

研修 2 日目は、12 月 21 日、22 日に上演されるファミリー劇場『さらって行ってよピーターパン』で来場者に配布するチラシを折り込む作業を行った後、舞台技術学校と演劇学校についての説明を受けた。演劇学校は、1983 年に日本の演劇創造をリードする人材を育成するために全国の公立文化施設で初めて開設された。舞台に興味がある初心者を対象とした本科と本科の修了者や他の養成機関を修了した人を対象にした研究科がある。基礎演技や舞踊の基礎、演劇論などを学ぶ。舞台技術学校は、1992 年に開設された。美術コース、照明コース、音響コースの 3 つのコースがあり、クラシックコンサートや軽音楽ライブなどで実際に照明や音響を担当する実習授業がある。舞台技術学校と演劇学校はどちらも週 2 回夜間に 2 時間の授業が行われ、年に数回日本を代表する演劇人や舞台技術者による特別講義が受けられる。また、学校を卒業した人たちは、ピッコロ劇団に入団するものが数名いるほか、舞台照明や音響業界に進むものが多いという。舞台技術学校と演劇学校についてこのような説明を受けた後、演劇学校の授業を見学した。本科生の授業では柿山伏の稽古を行っており、研究科の授業では 3 月に行われる卒業公演の稽古を行っていた。

研修 3 日目は、まずピッコロシアターの鑑賞サポート事業について、ピッコロシアターの公演では、音声ガイドやバリアフリー字幕、舞台手話通訳などのサポートを行っているという説明を受けた。その

後、兵庫県立芸術文化センターに移動し、中ホールで『さらって行ってよピーターパン』のゲネプロを見学した。

研修4日目は、兵庫県立芸術文化センターの中ホールで表方の業務を体験した。11:00公演と15:00公演ともに、開場中は来場者からキャストへのプレゼントを預かる作業を担当し、終演後は子供たちに貸し出していたクッションを回収する作業を担当した。さらに15:00公演は、『さらって行ってよピーターパン』を観劇した。

【考察】

ピッコロシアターは、他の劇場とは違う点が多くあり、少し特殊な劇場であると感じた。1つ目がピッコロシアターの鑑賞サポート事業である。ピッコロシアターでは、自主事業公演で鑑賞サポートとして、音声ガイド、バリアフリー字幕、舞台手話通訳を行っている。音声ガイドでは、劇団員が自ら音声ガイドの台本を作りリアルタイムでガイドを行っている。役者の登・退場、役者の動作、風景や舞台装置の転換、無音の場面では何が行われているか、また明かりの雰囲気などをガイドで解説している。衣装やあらすじ、舞台のセットなどガイドに載せることができない情報は事前に解説動画をアップすることで補っている。バリアフリー字幕でも、劇団員が自らスライドを作りまた自らリアルタイムでスライドを操作している。台詞や発話者の名前、効果音や音楽を字幕に映している。舞台の両端に字幕が映し出される場合や観客にタブレットを渡しタブレット上に字幕が映し出される場合もある。また、例えばファンタジー要素の強い台詞であればファンタジー要素のある字体にするなど、字幕の字体もこだわっている。舞台手話通訳では、舞台手話通訳専門の方が舞台上に立って演技の熱量をも体で表現しながら手話通訳を行う。『さらって行ってよピーターパン』の公演では、手話通訳の方が常駐し、ピッコロシアターの職員の方とともに聴覚障害のある来場者に劇場施設の説明などを行っているのを実際に目にした。劇場側に相談すれば事前に台本を貸し出してくれる劇場もあるということを聞いたことはあるが、音声ガイドや字幕などの鑑賞サポートを行っている劇場は少なく、サポートを行っていてもそのサポートが不十分である劇場が多い印象があった。そのため、ピッコロシアターが行っている鑑賞サポートは手厚く、ピッコロシアターの強みの一つであると感じた。鑑賞サポートには音声ガイドやバリアフリー字幕を作るための大きな労力がかかり、簡単にできるものではないが、他の劇場でもこのような鑑賞サポートの取り組みが広がってほしいと考える。

2つ目は、地域との関わりが深いということである。ピッコロシアターは県立劇場であるため地域の文化や芸術を促進することが目的であり、さまざまな事業を行っている。例えば、鑑賞機会の少ない地域の子供たちに向けて小学校を訪れ公演を行ったり、地域在住の外国人や地域の人々が交流し日本語を使ったコミュニケーションワークショップを行ったりしている。また、今回の『さらって行ってよピーターパン』では、オーディションで選ばれた地域の子どもたち10名が出演者として参加した。地域の人々に演劇に興味をもってもらい、またピッコロシアターの公演を見に来てもらうためにはこのような取り組みが重要ではないかと感じた。特にピッコロシアターの公演に地域の人々が参加することは、効果的であると考え。年齢に制限を設けずオーディションを行い、地域の人々が参加することができるような公演がもっと増えればいいのではないかと考える。

演劇学演習インターンシップレポート②

文学部 人文学科 演劇学専修 2 年 西村奈津希

【研修先】

兵庫県立尼崎青少年創造劇場

【研修期間】

2024 年 12 月 18 日～20 日、22 日

【研修内容】

本レポートは 2024 年 12 月 18 日から 12 月 21 日までの 4 日間における兵庫県立尼崎青少年創造劇場（以下、ピッコロシアター）での研修内容、学習内容及びそこから筆者自身が考察した演劇、劇場の意義について述べたものである。

4 日間の研修内容について述べる。まず、1 日目はオリエンテーション、ピッコロシアターの概要説明、劇団概要・公演が出来るまでの過程説明をしていただいた後、舞台技術学校の授業の様子を見学させていただいた。2 日目は 12 月 21 日、22 日の公演時に配布するチラシの折込作業を行い、演劇学校・舞台技術学校の概要についての説明をしていただいた後、演劇学校の授業の様子を本科と研究科のどちらも見学させていただいた。3 日目はピッコロシアターの鑑賞サポート事業の説明をしていただいた後、高校演劇の台本を読んでジャンル分けを行ったりした。その後兵庫県立芸術文化センターへ移動し、翌日から公演が始まる「さらって行ってよピーターパン」のゲネプロを見学させていただいた。4 日目は聴覚障がいの方に貸出する骨伝導のイヤホンが適切に作動するか点検を行った後、稽古の様子を 1 時間見学させていただいた。その後私は観劇に来られたお子様用のクッションを配布する係の仕事を担当した後、本番の公演を鑑賞し、再びクッションを回収する係にあたった。最後に 4 日間の振り返りを行い研修を終えた。

【学習内容】

まず県立の劇場であるピッコロシアター及びピッコロ劇団の特徴について深く知ることが出来た。当劇場は青少年が創造を行うための場所として作られたものであるが、現在もその「創造活動のための劇場」という点に非常に重きを置かれていると理解することが出来た。例えば、利用の約 70%を占める貸館においては利用者の目的が創造活動でなければ貸館できないとしている点が挙げられる。また、客席数が約 400 席と収容人数が少ない点や中ホールが大きさが大ホールの舞台の大きさと同じになっている点、また楽屋や搬入口が舞台裏と繋がっているところがアマチュアが創造活動を行う場として非常に使いやすい設計になっていると理解することが出来た。またピッコロシアターはピッコロ演劇学校とピッコロ舞台技術学校を運営しているところが他の劇場と比べて珍しい特徴の一つである。比較的安い授業料でありながら充実した講師の授業を受けることが出来るため、実際にその道のプロになる人も少なくないそうだ。創造活動の場を提供するのみならず文化人を輩出する役割も担っているピッコロシアターはまさに地域が芸術でつながり誰もが生きやすい社会をつくることに貢献していると感じた。同様に

して県立の劇場が県立の劇団を持つということも珍しい特徴である。

ピッコロ劇団では若い劇団員が自主的に上演をする「オフシアター」、一般向けの「本公演」、県内の中学校を招待して鑑賞してもらう「わくわくステージ」、子連れの家族向けの「ファミリー劇場」、小学校で公演を行う「おでかけステージ」、外部の方に脚本・演出を委託する「プロデュース公演」の6種類の公演を行っている。特に「おでかけステージ」と「わくわくステージ」に関しては地域や家庭での鑑賞格差をなくす取り組みであり兵庫県が掲げる芸術文化の創造を普及させる役割を担っていると理解することが出来たし、県立だからこそより兵庫県民に還元できる機会として力を注いでいる部分なのではないかと考えた。ある決まった年齢層をターゲットにした演目ばかりを行うのではなく、幼児から高齢者まで、それぞれに合った演目を満遍なく公演しているところが強みなのではないかと考えた。

またピッコロ劇団の特徴としては鑑賞サポートの実施が挙げられる。例えば視覚障がい者に向けての音声ガイド付き公演を実施したり、聴覚障がい者向けにバリアフリー字幕付き公演を実施したりしている。実際今回の「さらっていつてよピーターパン」の公演でも舞台の上手と下手に字幕を出していた。そのような公演を行うことで障がい者の方が観劇に来られる割合が高まったというお話もあり、すべての人に平等に鑑賞の機会を設けるということに繋がっているのではないかと考えた。しかし今回字幕付きの公演を観ると舞台だけに集中しようとしても視野の端で字幕が動くとどうしてもそれが気になってしまい、気が付いた時には字幕ばかり見ていたという現象に悩まされた。他の受講生も同じような事を言っていたので、これはまだそのような取り組みを行う劇団が少ないため鑑賞者がそれに慣れていないということも一つの原因だと考えられる。そのためそういった字幕付きの公演をはじめ、鑑賞サポートを行っている公演がより一般的になれば非障がい者も障がいを持つ人も同じ空間で共に楽しんで鑑賞できる日が来るのではないかと考えた。このような鑑賞サポートの取り組みを行っている劇団を持つ劇場であるがゆえにやや違和感を抱いた部分があった。それはピッコロシアターの大ホールの客席では階段の段差が大きく高齢の方には利用しづらくなっていたり、車椅子の席が設けられていなかったりする点である。これは現代におけるバリアフリーの考え方が設立した当時にはなかったということが考えられるが、ピッコロシアターのサポートクラブの高齢化という観点からも、鑑賞サポートに力を入れている劇場だからこそ改善していく必要性が大いにあるのではないかと感じた。

【考察、演劇と劇場の意義】

研修3日目にゲネプロを見学させていただき、本番の公演も鑑賞させていただいたが、本番を観る前は同じ作品を2日連続で観ても感じ方は変わらないのではないかと考えていた。しかし予想を裏切って作品に対する印象が大きく異なったことが非常に衝撃的であった。まずゲネプロでは観客も関係者のみで少なく、またストーリーを理解している人がほとんどであるためリアクションもほとんどなかった。そのため一人の世界で観ているような感覚に陥ったし、ファミリー劇場としてのオチがどこにあるのかがあまりよく分からなかった。しかし、本番ほとんど満席に近いほどの観客、子どもたちを収容した空間で観ると全く異なるストーリーのように感じられた。ゲネプロの時には気が付かなかったが、子どもたちのリアクションによってここがオチだったのかと気づくことが出来たし、舞台上の演技だけで作品が成り立っているのではなく、子どもたちの反応があって初めて一つの作品が完成したように思えた。現代ではSNSやYouTubeの普及によって一方的に受容し楽しむエンターテインメントが多く存在する

が、やはり演者と観客が、観客同士が同じ空間を共有し生のパフォーマンス、生のリアクションを双方向的にやり取りすることによって初めて生まれるものが存在すると改めて実感することが出来た。これこそが演劇の意義であり、また劇場はその空間を提供する場として非常に重要な役割を担っているのだと再認識することができた。

【おわりに】

4 日間の研修を経て、劇場とはあらゆる人々にとっての芸術創造の場、また鑑賞機会を提供する場であり、そのような役割を担っていると理解することが出来た。また、鑑賞サポートの取り組みや「おでかけステージ」「わくわくステージ」から、誰もが舞台芸術を鑑賞する機会が平等にある状態がより社会に根付いていくべきだと考えたし、そのような社会を築いていくことの重要性に改めて気づくことが出来た。また同じ時間、空間を共有して生のパフォーマンスを鑑賞することによって一人では感じる事が出来ない空気感や人間の温かさ、人間にしか出せないものを感じることが出来るということが分かり、改めて劇場の意義や演劇の意義について理解を深めることが出来た。

演劇学演習インターンシップレポート③

文学部 人文学科 演劇学専修2年 WUIWEN

【研修先】

兵庫県立尼崎青少年創造劇場

【研修期間】

2024年12月18日～20日、22日

【研修概要】

私は将来、劇場運営や演劇制作に携わる仕事に就きたいと考えています。そのため、実際の現場を体験し、より深く理解を深めたいと思い、今回の研修に参加しました。

本研修は、2024年12月18日から20日、22日の4日間にわたり、兵庫県立尼崎青少年創造劇場（通称：ピッコロシアター）で行われました。ピッコロシアターは1978年に開館し、1983年にピッコロ演劇学校、1992年にピッコロ舞台技術学校が開設され、1994年には日本初の県立劇団「兵庫県立ピッコロ劇団」が設立された歴史ある劇場です。

研修では、劇団部主任の新倉奈々子氏と広報交流専門員の古川知可子氏の指導のもと、劇場業務について学びました。また、ピッコロシアターの設立理念や特徴、現在の活動について学び、公立劇場で行われるリハーサル、ゲネプロ、本番初日の準備プロセスを制作の視点で体験しました。また、劇場の規模や予算など現実的な条件を踏まえ、演劇作品がどのように形作られていくかを学びました。さらに、ユニバーサルデザインを取り入れたバリアフリー演劇の取り組みについても詳しく教えていただき、最終日には、兵庫県立ピッコロ劇団のファミリー劇場公演『さらって行ってよピーターパン』の受付業務も担当し、大変貴重な経験となりました。

【研修内容と学び】

今回の研修では、初日の二日間で劇場および劇団の概要やその役割について学びました。その後、チラシ挟みや台本の分類といった、実際の劇場・劇団の業務を体験しました。また、ピッコロ舞台技術学校とピッコロ演劇学校の授業を見学し、公立劇場における演劇教育の現場についても学びました。三日目には劇団公演のゲネプロを鑑賞し、四日目には公演当日の受付業務に携わり、劇団スタッフの一員として接客を経験するとともに、千穂楽公演を観劇しました。

ピッコロシアター（ピッコロ劇場）について。ピッコロ劇場そのものについては大きな学びがありました。この劇場は設立当初から、青少年の創作活動を支援する文化センターとしての役割を担っており、CSR（Culture, Sport, Recreation）施設として運営されています。現在は、自主事業として演劇や音楽、落語の鑑賞事業や文化セミナーを企画運営する一方、劇場施設の貸館業務も行っています。ただし、創作活動のための施設であるため、ワクチン接種会場や投票所、企業向けの利用などには貸し出されないというポリシーがあります。料金設定も非常に安価であり、営利目的ではない運営方針が守られています。その結果、劇場の稼働率は80～90%と高く、利用者の多くは文化を純粋に楽しんでいます。

バリアフリー演劇について。ピッコロ劇団の取り組むバリアフリー観劇事業にも感銘を受けました。この事業を担当している古川氏が、その理念や取り組みについて解説してくださいました。特に印象に残ったのは、古川氏が「社会包摂」という言葉の不適切さについて言及したことです。これまで排除してきたのは劇場側であるにもかかわらず、包摂という言葉を使うことに違和感を感じると話されました。外国人や高齢者、学校に通いにくい生徒、視覚障害者、聴覚障害者、その他さまざまな背景を持つ人々が楽しめる演劇を提供することの意義について考えさせられました。

具体的な取り組みとしては、音声ガイドの提供があります。これには、登退場や動作、風景、照明の雰囲気などの説明が含まれ、台詞と重ならないよう工夫されています。また、事前にあらすじやセット、登場人物の紹介（役者自身の声で）といった音声ガイドも提供されています。触図や舞台美術の立体コピーによる説明も行われており、視覚的な情報を補完する工夫がなされています。さらに、バリアフリー字幕では、発話者の名前、効果音、音楽の説明が加えられ、作品ごとにフォントや色を調整するなど、細やかな配慮がされています。舞台手話通訳も用意されており、観劇の幅が広がる取り組みが実践されています。社会との繋がりを深く考え、どのようにすればそのメッセージが届くのかを探る工夫は、演出家だけでなく、役者や舞台裏で支えるすべてのスタッフにとっても重要であると実感しました。客席にはそれぞれ異なる背景を持った観客が集まっており、その多様性を意識することが、より豊かな演劇体験を生み出す鍵であると感じました。

ピッコロ劇場・劇団の理念には「売る」ことではなく、「ブランドを作る」という考え方が根底にあります。彼らは、単に経済的な利益を追求するのではなく、合理的調整を通じて、より多くの人々に演劇を届けることを大切にしています。このようなバリアフリー演劇の取り組みは、一見すると利益が出にくい事業でありながら、ピッコロ劇団はその活動を続けており、その姿勢に感銘を受けました。

演劇と社会の繋がりについて。この研修で特に印象深かったのは、ゲネプロから本公演へと進んでいく中で感じた劇場の雰囲気の変化です。ゲネプロは、制作関係者やスタッフのみが集まり、観客がいない状態で行われます。そのため、劇場の空気感や演技に対する反応は、何とも冷静で淡々としたものでした。子ども向けの公演だったため、劇中で仕込まれたユーモアや教育的要素に対しても、ゲネプロの段階では特に反応がなく、どこかしら緊張感や不安も感じられました。しかし、本公演が始まると、劇場の雰囲気は一変しました。

観客が座席に着き、幕が上がると、子どもたちの無邪気で素直な反応が劇場を満たし、演者たちの演技にも新たな活力が生まれました。特に、子どもたちが笑顔で笑い声を上げ、物語の展開に驚きや喜びを示す様子は、演劇の力を改めて感じさせてくれる瞬間でした。観客の反応によって、演技が生き生きと変化し、演者たちもそのエネルギーを受けて、より一層感情を込めた演技を展開していったのです。この体験を通じて、演劇において観客の存在がどれほど重要であるかを実感しました。

また、観客がいなかったゲネプロでは、演技の細部や演出がどのように観客に伝わるかという点について十分に意識することが難しかった一方で、本公演では観客の表情や反応を直接的に感じ取ることができ、演者としてもそのフィードバックを反映させながら、より豊かな演技が展開されていく様子に感動を覚えました。このように、演劇は一方的な表現ではなく、観客との相互作用の中で完成されるものであると深く理解しました。

ファミリー劇場での公演だったことも、この体験において特に重要な要素でした。子どもたちの無邪

気で率直な反応は、他の年齢層の観客と比べてより鮮やかで、演劇がどれほど観客との共感を大切にしているのかを教えてくださいました。観客がいることで、舞台の上の出来事がどれほど生き生きとし、劇場全体がひとつの大きな体験へと変わるのか、その瞬間を目の当たりにすることができました。

このような体験を通じて、劇場と観客との関係性がいかに演劇の質を高め、観客の感動を引き出すかについて理解することができました。演劇が単なる演技の集まりではなく、観客との共鳴があって初めて完成されるものであるということを強く実感し、今後の演劇活動に対する考え方が大きく変わりました。

【感想と考察】

欧米と異なり、日本では劇団を持つ劇場の数が非常に少ない現状があります。その要因について、文化や地域性との関係性を考えていきたいと思いました。

また、研修の休憩時間中に他のインターン生とともに、今回の公演の費用を大まかに試算してみました。その結果、チケット収入だけでは今回の公演にかかる支出を賄うことが難しいと判断しました。この研修で最も考えさせられたのは「資金の問題」です。新倉氏や古川氏の話によると、ピッコロ劇場・劇団の運営費の半分以上は県からの助成金によって支えられているとのことでした。こうした支援がなければ、劇場や劇団の運営、さらには演劇学校や舞台技術学校の設立は難しいと感じました。実際に、宝塚や劇団四季、東宝などの商業演劇も政府からの助成金なしでは成立しづらいのではないかと考えます。

私は、演劇資源が乏しい地元・台湾で演劇事業を活発にしたいという夢を持っています。この研修を通じて、劇場や劇団を設立し、演劇を上演することがどれほど困難であるかを理解しました。現実的な問題として、資金援助が最大の課題であることを痛感しました。将来、もしそのような機会があれば、さらに深く考え、具体的な方策を模索していきたいと思います。

一方で、今回の研修では担当者からの話を聞く機会が中心で、実際に演劇の上演に至るまでの具体的な流れに触れる機会は限られていました。もう少し制作に関わる体験ができれば良かったと感じます。最終日の本公演では受付業務を担当しましたが、普段アルバイトとして劇場運営スタッフの経験があるため、それほど新鮮さを感じることはなく、むしろ普段の業務よりも楽に感じました。

せっかくの機会であったため、実際に演劇制作に携わる経験がしてみたかったです。たとえば、リハーサルやゲネプロの際に観客席から鑑賞するだけではなく、舞台袖に立ち、セットの動き、役者の動き、舞台監督の指示などを間近で見学できれば、より深い学びになったのではないかと思います。今後、こうした具体的な現場体験を通じて、演劇制作についてさらに理解を深めていきたいと考えています。

【まとめ】

四日間の研修を通じて、劇場の運営や制作に関わる現場での体験は、授業や理論だけでは得られない貴重な学びの場となりました。特に、劇場で実際に働くスタッフの方々の話を直接聞くことで、演劇制作における実務の重要性を実感しました。授業で学んだ理論が現場でどのように活かされているのかを理解でき、これからの自分の目標に対する確信が深まりました。

また、ピッコロシアターでの実務体験を通じて、劇場運営の難しさや、特に資金面での課題について

改めて認識しました。劇場の運営が助成金に依存している現状を知り、今後、台湾で演劇事業を活性化させるためには、資金調達や支援の仕組みについて真剣に考えていかなければならないと強く感じました。

最終日には、受付業務を担当する中で、普段のアルバイト経験とは異なる視点から、劇場運営に触れることができました。ただ、演劇制作の流れ全体に関与する機会は少なかったため、次回はリハーサルやゲネプロの裏側をもっと深く学べるような体験ができればと思います。それでも、短期間で多くの知識を吸収でき、今後のキャリアに対する意欲がさらに高まりました。

この研修を通じて得た知識や経験を、今後の学びやキャリアに活かしていきたいと思います。劇場運営や演劇制作の現場に関わることへの熱意が一層強まりましたし、今後は自分が目指す演劇の世界を具体的に築いていくために、さらに理解を深めていきたいと考えています。

演劇学演習インターンシップレポート④

文学部 人文学科 演劇学専修 2 年 吉川咲那

【研修先】

兵庫県立尼崎青少年創造劇場

【研修期間】

2024 年 12 月 18 日～20 日、22 日

【はじめに】

2024 年 12 月 18 日から 21 日までの 4 日間、兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアター(以下ピッコロシアターと記す)にてインターン研修に参加した。前半の 2 日間はピッコロシアターについて職員の方から講義していただき、後半 2 日は兵庫県立文化芸術センターにてファミリー公演「さらっていつてよピーターパン」のゲネプロ鑑賞や当日制作に携わった。

【ピッコロシアターについて】

ピッコロシアターはピッコロ劇団、演劇学校、舞台技術学校を持ち合わせている県立劇場であり、地域の人が演劇できる場所という目的の下設立された。県で劇団員を雇い、県で演劇学校を運営しているという演劇に特化した他にない体制をとっている。そのため地域に根付いた活動が多く見られる。特に毎年 8 月に開催される県民参加型の貸館事業である「ピッコロフェスティバル」やピッコロ劇団による地域の小学生向けの「おでかけステージ」の上演がその例といえるだろう。現代だけでなく、設立当初も地域への活動が行われており、特に設立後 1 年経たずして起こった阪神淡路大震災の避難所に徒歩で移動し、子供から大人までを元気にする上演を試みた。これを機にピッコロシアター、並びに公立劇団は地域の方々に認められ現在まで続いている。

また、もう一つのピッコロシアターの特徴として鑑賞サポートを含む社会包括に力を入れていることが挙げられる。公立劇場としては早期に鑑賞サポートを導入している。その方法も多岐に及び、音声ガイド、字幕公演、ヒアリンググループの提供等を行っており、より多くの人に演劇を楽しんでもらうことを目指している。こうした福祉サポートを始めたのは古川さんだそう。古川さんはピッコロシアターにて貸館対応や鑑賞サポートを担当している。彼女が友人から公立劇場なのに福祉サポートは行わないのかと言われたことがきっかけで鑑賞サポートを始めたそう。その行為はピッコロシアター全体に行き届き、今では字幕公演の字幕作成はピッコロ劇団の役者が行っている。この字幕を作るうえでピッコロシアターが大切にしていることがある。それは情報を正確に伝える字幕ではなく、想像しやすい字幕にすることだ。字幕でも楽しんでもらおうという試みであり、単に文字を並べるだけでなく、文字の出し方や大きさ、フォントまでこだわって作成している。

ピッコロシアターは 2024 年で 30 周年を迎える。また 2025 年には阪神淡路大震災からも 30 年ということに即して 2 月にはソーントン・ワイルダー作『わが町』を別役実が潤色した「神戸わが町」を上演予定である。

【演劇学校・舞台技術学校について】

研修中にはピッコロ演劇学校と舞台技術学校についても学び、見学した。ピッコロ演劇学校・舞台芸術学校はピッコロシアター設立の後に作られた。若者や地域貢献が見込まれる人を対象に演劇を学べる場を作っている。毎週ピッコロ劇団員を中心にプロ経験のある講師陣がピッコロシアターに出向き各々の専門分野を中心に教えている。研修中に見学をさせてもらったのはプロのダンサーを招いてどのような照明を作っていくかという講義、美術製作演習、狂言の演技の演習、演劇学校の卒業公演の稽古であった。どれも教師と近い距離で教えてもらうことができ、生徒も気軽に質問や提案をしていた。そしてなによりも実際の劇場で実践することができるということが生徒にとって身に付きやすい環境であるだろう。劇場・劇団を持っているからこそできる環境だ。

【上演と制作研修について】

本番日までは本公演のフライヤーの挟み込みや本年度ピッコロシアターで行われた高校演劇の創作脚本のジャンル分け、ゲネプロ鑑賞を行った。特に興味深かったのは高校演劇脚本のジャンル分けであった。筆者は高校演劇経験者であるが、生徒創作の脚本が県立で製本され保存されることはなかなかない。誰でも来ることができる場所に生徒創作の脚本を置くことで若者が演劇という場所で輝くことができるきっかけを作っていた。ゲネプロ鑑賞で初めて「さらって行ってよピーターパン」を鑑賞した。夏に上演したものと異なり、子供キャストが加わった。ピーターパンの主な登場人物が子供のキャラクターであるのに反して役者は大人であるためその差に溝を感じたが、子供がインディアンや迷子の子として出演することで場が温まった。子供キャストを使用することはコロナ禍以降初の試みであり、現場では流行り病にかからないよう対策がされていた。劇の内容は私たちが知っているピーターパンとは異なり、子供が楽しめるようなコメディであったが、やはり別役実が書いてだけあり不条理演劇であった。その不条理なシーンを見て観客としてくる子供たちがどう感じるのかと考えさせられた。本番では不条理さに泣いてしまう子供もいた。

本番日は鑑賞サポート係として携わった。古川さんと一緒に聴覚障がいのある鑑賞者の受付を行なった。本公演ではサポートが必要な方用の受付を用意していた。受付には筆談用のボード、指差し接客シートが用意され、手話通訳士の方も受付を一緒に行った。またホワイエにも一人手話通訳士の方に立つてもらうことで会場内までのサポートを行う体制を整えた。実際にサポートをすることはなかったが、手話通訳士の方と話す中で関西では鑑賞サポートといった取り組みをする公立団体が少ないという実態を知った。また、ピッコロシアターの字幕公演は楽しむ工夫がされており、字幕があることでより話が楽しめるように作られているところに感激を受けたと観客、通訳士目線の意見を聞くことができた。本公演でも字幕があることでインディアンの言っていることが理解しやすくなるという工夫がされていた。開演すると一人の通訳士は事前に予約していた聴覚にサポートの必要な鑑賞者の横に付き、私たち研修生は後方の席にて開演 15 分後頃から鑑賞した。会場に入るとファミリー公演ということもあり会場の約半分を子供(その多くが幼児)が占めていた。関係者のみが鑑賞していたゲネプロとは異なり子供の声で溢れかえった。今まで私が鑑賞してきた演劇は幼児の割合が少なかったため他の鑑賞者の音に厳しいスタッフや鑑賞者が見受けられたが、本公演では子供がいることで大きな声を出して演劇を楽し

むことができる場所になった。閉演後も役者のお見送りがあり観客が笑顔で会場を去っていく姿が印象深かった。

【今後の劇場の在り方について】

本研修を通じて地域性・福祉包括・演劇の普及について学んだ。ピッコロシアターはすべての人に楽しんでもらい、地域を中心に演劇を普及させることに重きが置かれている。演劇を見てもらうことに対して見えないから無理だ、聞こえないから無理だ、静かにできないから無理だという姿勢ではなく、できないことがある方にも楽しんでもらえるように劇場側から寄り添う姿勢をすることで演劇を楽しむ人が多くなると考えた。古川さんは需要があると決まってから行うのではなく、こちらからサポートがあると提示することが大事であるとおっしゃっていた。劇場側から無意識に行われる観客の排除に常に意識を向け、歩み寄る姿が演劇を楽しんでもらえる劇場の在り方であると考えた。

また、本公演の形態から観客にとっての劇場の在り方についても考えさせられた。先述した通り、子供がいるファミリー公演であったため音に対して寛容な観客が多かった。客が集まりにくい原因である演劇の敷居の高さを感じさせない公演であり、だれでも楽しめる空間を実感した。静かにできない方でも劇場に入りやすい環境にするには、演劇を見に来る人も運営する人もお互いを受け入れることで可能になると考えた。